

公開セミナー

「事例から見た初年次教育の類型的整理の試み-東大へのインプリケーションの視点から-」

講師：川島 啓二氏（国立教育政策研究所高等教育研究部 総括研究官）

日時 2006年10月25日（水）11:00～13:00

場所 101号館1F音楽室

要約版

■FYE(First Year Experience)の構造と類型

FYEには様々な分類があるが、川島先生が、FYEの提供形態によって整理したものは次のとおり。（図1）

(1)授業科目（正課）の次元

①プログラム志向⇔②コンテンツ志向

(2)教育手法（環境）の次元

③「場」志向⇔④ツール志向

「(1)授業科目（正課）の次元」とは、制度的なカタチとしてどういうカタチをしつらえていくかということに関心が向けられているものである。その中の、①プログラム志向とは、授業科目の組み合わせの中でラーニングアウトカム（学習成果）を期待していくものをいう。一方、②コンテンツ志向とは、アカデミックリーディング・ライティング、プレゼンテーション、自校教育というものが含まれ、コンテンツの充実を重視するものをいう。自校教育とは、自分の大学の歴史を学ばせるもので、立教大学や九州大学、早稲田大学で先駆けて行われてきている。自分達の大学の歴史を知ることはセルフエスティームにもつながり、また、大学側の経営戦略にも結びつき、自校への愛着心が、卒業後の母校へのヘルプなどにもつながっていく可能性もでてくる。自校教育の多くはリレー式の授業で行われている（学長など）。

一方、「(2)教育手法（環境）の次元」とは教育のシー

ンを大切にするもので、③「場」志向とは、空間の持っている摩訶不思議な、名状しがたい力のよ様なものを期待して、そういう「場」をしつらえていくものを言う。代表的なものとして、京大のポケットゼミやラーニングコミュニティというものがある。それに対して④ツール志向とは、ツールでしっかりした仕掛けを作ることにより、初年次における学習転換に貢献するものを言う。例えば、ポートフォリオ（個人の学習記録や生活記録）を作らせるという方法があり、これは自己管理ができない学生には効果があると言われている。他にも、アドバイザー制度として、10人～20人の学生に対し1人の教員を割り当て、学生はその先生に対して学習の相談、生活の相談をする。あるいは学生から来るのを待っているだけではなく、先生の方から定期的にアプローチを行っていく。早稲田大学でも、学生20人あたり一人の教員または職員を割り当てて学生の支援にあたらせるということを総長が考えているとのこと。

このように初年次教育とは、いろんなメニューがあるので、そのメニューの中から各大学が必要などころをとればよいだろう。

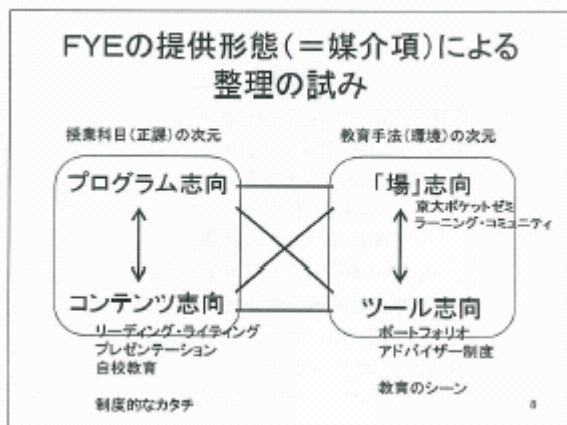


図1

■事例から見た FYE の実際—5 大学の事例—

(1)玉川大学—カリキュラム設計による FYE—

玉川大学はかなり早い段階から初年次教育に対して関心をもっており、アメリカの「パワーラーニング」という教科書を訳したりしている（学内のみで使うという条件で著作権をとっている）。その他「大学生活ナビ」という本を制作し（市販されている）大学生に配ったりしている。

カリキュラムとしては、「コア科目（必修）」と

して、「一年次セミナー」を実施しており、この授業では、スタディスキルやスチューデントスキルを教えている。必修にしている学校は今はまだ少ない。その他、「コア科目（選択必修）」として「言語表現科目群」の中に「ことばと文化」「アカデミックライティング」などの科目が、また、「生活関連科目群」として「学生と社会生活」「学生と大学」といった科目が用意されている。専門への導入教育としては「導入科目群」を配置している。非常にきれいに整理されたカリキュラムとなっている（図2）。



図2

(2)長崎大学—組織的な運営とFD機能の埋め込み—

長崎大学は特色 GP で一番最初に初年次教育を打ち出した大学である。長崎大学では、全学共通の学部混在型クラス編成による教養セミナーを行っており、これが初年次科目に該当する。その他環境科学部で文理融合型の科目を提供しており、工学部ではリメディアル教育を行っている（リメディアル教育は初年次教育には含まれないとされている。現在アメリカではリメディアル教育とは言わず、Developmental Education と言われている）。また、教養セミナーにおいて、授業評価とFDを組み込んだ教育マネジメントサイクルを構築し、それを大学教育機能開発センターで実施している。



図3

(3)新潟大学—センター組織の機能化を含んだ学士課程教育の再構築とFYEの埋め込み—

新潟大学では初年次教育の導入が全学的な大学改革の一環として取り組まれている。新潟大学ではスタディスキルを一年生全員の必修科目としている。その他、名古屋大学、長崎大学も必修にしているが、どの大学も内容としては各先生方の専門によるところが大きく、まだ不十分な面が見られる。科目についてはベンチマークシステムで、例えば工学部の化学と農学部の化学がそれぞれの水準に相当するかという表示を行い学生にわかりやすくしている。管理は全学教育機構が一括して行っている（授業科目の決定権限などももっている）。まず枠組み（図4）を作ったということが評価される。

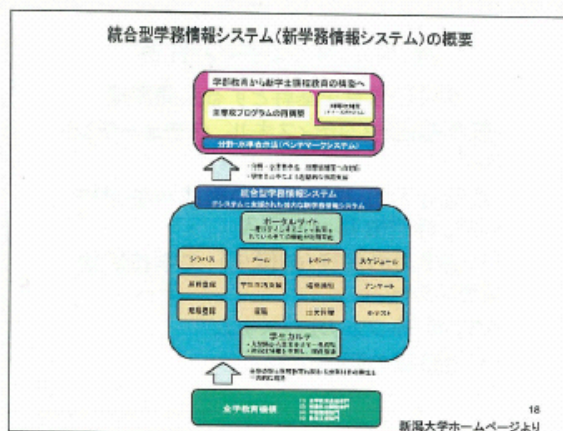


図4

(4)名古屋大学ーコモンベーシックとしての基礎セミナー

名古屋大学では平成 15 年から必修科目として「基礎セミナー」を設けている。文系 4 単位、理系 2 単位と単位数は違うが、「多面的な知的トレーニングによって、コモンベーシックとしての読み、書き、話す能力の涵養を図るとともに、真理探究の方法と面白さを学ぶ科目」として、全学のカリキュラムの中の基礎セミナーとして位置づけている。(図 5)

科目区分	内 容
全学基礎科目	初年次生を大学教育へ導入し、自立した学習能力を身につけるとともに、文理に共通した基礎的学習方法を学ぶ科目
基礎セミナー	多面的な知的トレーニングによって、コモンベーシックとしての読み、書き、話す能力の涵養を図るとともに、真理探究の方法と面白さを学ぶ科目
言語文化	専門的学習のスキルとしての外国語の能力を高め、異文化理解を深めて、国際社会に相适应しい教養を養ふ科目
健康・スポーツ科学	健康に関する自己管理能力、生涯スポーツの基礎となる運動の習得、スポーツを通じたコミュニケーション能力やリーダーシップを養ふ科目
文系基礎科目	人文・社会科学系分野の学習体系を認識するとともに、自主的学習能力を培う科目
理系基礎科目	自然科学系分野の学習体系を認識するとともに、自主的学習能力を培う科目
文系教養科目	人文・社会科学系分野の諸現象について、その間の諸現象を学際的、総合的に分析・把握する能力を養ふとともに、他の学際分野との関連性について理解する科目
理系教養科目	自然科学系分野の諸現象について、それらの諸現象を学際的、総合的に分析・把握する能力を養ふとともに、他の学際分野との関連性について理解する科目
全学教養科目	文・理の専門分野の知何を問わず、豊かな人間性を養ひ、総合的学習能力を高める科目
開放科目	学生の自主的で多様な学習意欲に応えるため、学際専攻に関連する専門系選定科目のうち、他学部の学生の受講が可能であり、かつ、有資格であると認めて全学に開放する科目

図 5

(5)金沢工業大学 (工学設計教育を基幹とする人間形成)

金沢工業大学の長は、「工学設計を基幹とする人間形成」にある。特色 GP を 4 年間で 6 つとっており、1 番最初のテーマが「工学設計教育」。学部は 3 つで、1 学年 1000 人くらい。大学院進学者は 1 割程度。卒業後の離職率は一般には 3 ~ 4 割くらいだが、この大学の卒業生では離職したという話は殆ど聞かないとのこと。自習室は 24 時間開放。

初年次科目として「修学基礎」というものがあり、ここではスタディスキルやチューデントスキルを中心に教える。カリキュラムガイドブックの「修学基礎」の箇所を見ると、この科目の「行動目標」が具体的に明記されている。このようにラーニングアウトカムを明記し、出口管理をすることが今は求められている。それは大学トータルとしてもそうであるし、各科目ごとにもこの科目を履修したら結局何になるのかということをはっきりさせるということが求められるようになってきている。

この大学では、大学内の一体感というものを持つために、学生がキャンパス内で勤務するという仕組みができています。ユニフォームを着たスタッフがテキパキと仕事をしていて好感が持てた。「夢考房」という施設では上級生が下級生を指導している姿が見られた。キャンパスは一種のコミュニティとなっている。学生はサービスを提供するお客様であると同時に、大学の資源でもある。学生を活用するという事は大学の一体感を強めるという面もあり、学生の Socialization にもなる。

工学設計教育とは、5 ~ 6 人のグループに分かれて製品開発のようなことをやっていくものである。そのためにニーズの把握や情報の収集と分析、プレゼンテーションや討論などを行っていく。注目すべきは「工学設計科目で獲得する能力」として掲げられているもので、「創造性」「チーム活動能力」「開発発見・解決能力」「自学自習能力」「プレゼンテーション能力」「コミュニケーション能力」「知識を応用して新しく価値を生み出す力」となっており、技術や専門の話ではなく、一般的能力=ジェネリックスキルを獲得することを目標としている。工学という学問をどういう風にデザインしていくのか、を目的とした科目である。(図 6)

また、勉強についていけない学生の指導のために工学基礎教育センターを設けている。ライティングセンターもある。



図 6

■初年次教育を取り巻く大学教育改革の文脈

文部科学省は、大学は学士課程を通じて「アドミッションポリシー」「カリキュラムポリシー」「ディプロマポリシー」を明確にし、卒業時の目標として「21世紀型市民」「課題探求能力」「社会人基礎力」を掲げており、学士とはどういう学位なのか、どういう能力が身に付くのか、という出口管理をしっかり行っていくことを考えている。その枠組みの中で初年次教育はどのように位置づけるのかという話の流れになりつつある。新潟大学の例のように、システム再編とマネージメントをどのように変えていくかということに関心は移りつつある。初年次教育もその大きなシステムの中でどういう風に機能化させていくのが問題。FDはそれら全体を支えるものとして位置づけられている。(図7)

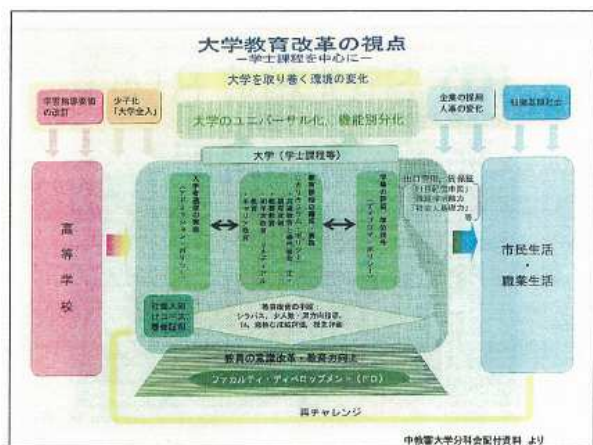


図7

私としては、組織や仕組みに関心があり、ラーニングアウトカムを達成するための組織とか仕掛けとかそういうものは媒介項だと思っている。その媒介項を機能させるための実施体制をどのようにしたらよいかということに関心がある。人の意識を変えることは難しいが、仕組みだけは作ることが出来る。仕組みを作ればそこで多少は動いていく。

■東大へのインプリケーション

初年次教育は大学の特徴に応じてカスタマイズする必要がある。東大生の特徴は何なのか、調査が必要なのではないか。対象者である学生に対するアセスメントは必須だろう。

東大生にとっての「大学の適応」とは何か。社会的レリバンスをどのような文脈で語るのか。東大生が何を必

要としているのかという研究開発があるのではないか。

■ディスカッション

ー金沢工業大学は学長が強いリーダーシップをもっているのか？

ー(川島先生) 集団体制でやってきたが、あるターニングポイントを上手くコントロールできた学長がいたらしい。ただ、話を聞いていると、創設以来の流れの中で、特にギアをきったというわけではないようだ。

ー東大は、進学振分け制度があるので、大学に入っても競争が続いていて、周りのこと、人がどうしているかというのを気にしている人が多い。だから知的に遊ぶといった余裕はない感じがする。それは進振りの負の部分であるのではないか。

ー金沢工業大学では、入試制度に工夫があるのか。東大に入るような受験勉強をしてくと燃え尽き症候群になってしまう場合がある。

ー金沢工業大学の夢考房みたいなものが仮に東大にあって、レーシングカーを作っていたとしても、進振りで結局レーシングカーを作るような方面に進めないといったことが起こり得る。金沢工業大学の学生は、大学が道を示してくれれば、そこでのびのびとやれる環境にあるんだと思うが、東大の学生はまだ進振りががあるので、安心した場所に行くまでは気を抜けないという状況にあると思う。

ー川島先生のおっしゃるように、東大では学生生活実態調査というものをやっているが、表面的なものなので、教養の評価部門(または学生相談所)で学生がどういった問題を抱えているかというような学生に対する調査をやってみる価値はあるのではないか。

ー健全なラーニングコミュニティが今東大にあるかどうか。

ー東大の学生生活実態調査を分析すると、勉強志

向の学生と楽しみ志向（勉強以外）の学生の比率は昔と殆ど変わっていない。しかしそれぞれに対する満足度は、勉強志向の方は下がっていて、楽しみ志向は上がってきている。勉強志向の人達が満足を得られていないという状況は由々しきこと。彼らに方向性やコミュニティを与えられないか。（金沢工大の）工学設計教育は、勉強と遊びがうまくミックスされているのだろう。

－（川島先生）金沢高専の学生は、自分を認めてもらえる場所に出会うことがまず新鮮であり、そこでのメニューがしっかりしていて、就職率も高いので、ここでがんばっていけば大丈夫なんだという安心感が得られる。一方、東大の学生は、高校までに認められてきているケースが多く、レベルの高い中での上手な転換の支援というようなことが仕組みれないといけないのではないか。一筋縄ではいかないのでは。

（文責 吉本）